

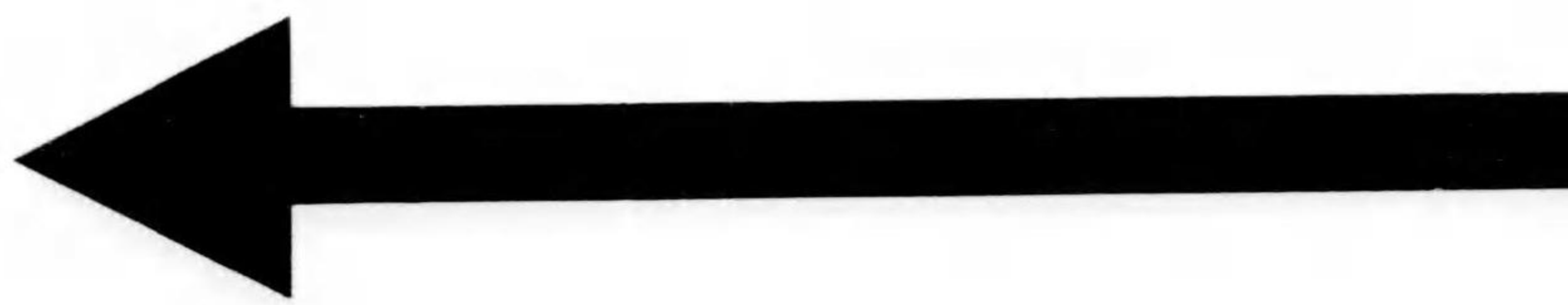


特100

577



始



◆石童丸一代記和讃

月に村雲花に風散てはかなき世の習ひ。

筑前筑後肥前肥後大隅薩摩で六ヶ國探

題守護を司る文武二道に秀でたる加藤

左衛門重氏は娑婆の無常を悟つゝ國に

妻子を振り捨て諸國修行に出で給ふ時

に御臺の千里姫。身重成しが程もなく。玉
の様なる子を産て。石童丸ど申しけり。ま
だ見ぬ親に戀憧れ。石童十四の春の頃父
は。高野に在すると。風の便りに聞しより
母の御臺と手を執て。馴ぬ旅路にたどり
つゝ。紀の國さして出にけり。日々にもの

憂き草枕。遂に高野の麓なる。學文路の宿
にたどりつき。玉屋が茶屋に宿を取明日
は御山に登らんと。旅の勞れもうち忘れ。
母は我子にうち向ひ。日頃年頃雨風に。こ
がれ慕ひし父上の。御顔を見も遠からず。
必ずこゝろ落すなど。こゝに不憫の物語

り。宿の亭主はもれ聞て。二人の前に出で
 来り。申上げます旅の人。高野の山のおき
 てには。弘法大師の誠めに。女人は御山に
 登られず。聞くに御臺は驚いて。我子の袖
 に取り縋り。なら情なや石童よ。母は御山
 へ登られず。汝が御山へ登るなら。父の人

相を教ゆべし。父は人よりせい高く。左の
 眉毛に黒子あり。筑前訛りの人なるぞ。其
 を證據に尋ぬべし。言はれて石童悲みの
 涙ながらに立上り。母に暇を告げながら。
 父を目的に高野山。杖に縋りて不動坂。登
 り瘁れし石童は。日も入相の暮方に。波切

不動ふどうに参まゐりては。南無なむ大聖たいしやうの不動尊ふどうそん。石童いしどう
これまでまい是迄参まゐりしは。たゞ父上ちやうじやうに逢あわしたため。何卒なにとぞ
あはして下くだされと。最いとも殊勝しゆしよふにふし拜をがみ。
ろのよ其夜みは御堂ごどうへ籠こもりてぞ。臂ひじを枕まくらに笠屏風かさびようぶ。泣なく
くねむ々眠ねむりし哀あれさや。三更さんこふし四更こふと夜よも深ふけて。
ごこふ五更ごらの空そらも明あけ渡わたり。はや寺々てらぐの曉あけの鐘かね。

夫これより御堂ごどうを立出たちいでて。漸よふやく御山みやまへ登のぼりけ
る。九百九十くひやくくじうの寺々てらぐや。峯々みねくたにぐ谷々たにぐこゝかし
こ。七堂しちどう伽藍がらんの隅々すみぐに。父ちやうの在ありかを尋たずぬれ
ど。父ちやうかと思おもふ人ひともなし。

◆荻萱かるかや親子おやこ對面たいめん和讃わさん

泣々なくくまい参まゐる奥おくの院ゐん。十八丁じうはつちやうが其そのあいだ。右みぎも

ひたりでりんとまへ
 左も五輪塔。前も後も卒堵婆にて。最物す
 ごとき道すがら。音に名高き玉川の。無明の
 橋にさし掛り。遙か向を見渡せば。苺萱道
 心重氏は。圓空坊とぞ改名し。左手に花籠
 たづさにて。右手に珠數をば爪繰て。光明
 眞言唱つゝ。奥の院より歸る時。はからず

あひいしとら
 逢し石童と。互に親とも吾子とも。知ぬば
 ろばよろをみあみおろかほかほいしとら
 側に寄り添て。見上げ見下す顔と顔。石童
 まるふりそでかるかやとらみころもそでらで
 丸の振袖と。苺萱僧の御衣の。袖と袖とが
 もつおやこいんねんふか
 纏れしは。親子の因縁深かりし。其時石童
 かるかやころもらでとすがたすね
 苺萱の。衣の袖に取り縋り。お尋します御
 ろうこれみやまらのうちいませうしん
 僧よ。此なる御山の其内に。今道心はおは

さずや。せうぞおしへたまて賜はれと。云いれてかるかや苜萱さ聞きくみよりおも見みればおよ幼おなきひ一人ひとり旅たび。腰こしにさ差さしたるこ小脇わき差ざし。某それがしか加藤かとうをな名乗のるときの。拜領はいりょう致うせしかた刀ななり。扱さてはふ不思議しぎと思おもども。煩惱ぼんのう我身わがみにお起こりしと。我われと心こころを取とり直なし。石いし童丸どうまるにう打うち向むかひ。いかにわか若年とし成なりとても。そ

らな物ものの尋たずねよう。千せん萬まん人にんの御僧達ねそうたち。容よう易いに尋出たづねだされまじ。若もしも逢あふわんと思おもふなら。八方はつぱう八口やくちに張はりをせよ。遙はるかに見みゆる彼あの森もりが。あれが御山みやまの張札場はりふたば。聞きて石童いしどう涙なみだぐみ。哀あれ御慈悲ねじひに其札そのふだを。御書被成ねかきなされて下くだされど。強しいて願ねがへば苜萱かるかやは。我われは途と中ちゆうの事ことゆへ

に。筆ふでも持もたず紙かみもななし。我わが庵室あんしつに來くるな
 らば。其札書そのふたかいて進しんずべし。聞きて石童いしどう歡よろこんで。
 御連被成ねつれなされて下くだされど。願ねがはば苜蓿かるかやわわ憐あはれみ
 て。石童丸いしどうまるの手てを引ひいて。草くさの庵いはりに連つれ來きた
 り。草鞋わらじを脱ぬがし上うへにああげ。硯すいりひきよ引寄ひきよせ筆ふでを取と
 り。國くには何國いづくで名なは何なんと。國くには筑前ちくせん苜蓿かるかやの。

文武ぶんぶ二道にどうに秀ひいでたる。加藤左衛門重氏かとうさゑもんしげうじは。
 我父上わがちちうへであるなりと。名乗なりのれば苜蓿かるかや驚おどろい
 て。持もちたる筆ふでを取とり落おし。暫しばし涙なみだに暮くれけ
 れば。石童いしどう其みと見みるよりも。泣なせ給たまは不思ふし
 議ぎなり。是これは御僧何故おんそうなにゆへぞ。我父わがちちならば片時かたとき
 も。早はやく名乗なのりて玉たまへかかし。云いはれて苜蓿かるかや思おもふ

よう。扱さても我子わがこか懐なつかしと。云いわんやせしが
 待まてしばし。一ふた度親子の名乗なをば。せじとの
 誓ちかいは破やぶられず。せき來くる涙なみだを押おし止め。我われは
 父ちちには在あね共ども。其その苜かる萱かやと申まふし、は。吾朋友わがともたち
 でありしかど。去年きよねんの秋あきの末すへの頃ころ。重おもき病やまひ
 を煩わづらひて。冥土めいどの旅たびに出いで立たちぬ。斯かる事ことを

ば露つゆ知らず。海山うみやま越こて遙々はるばると。尋たずね來きたりし
 汝そなたをば空ひなしく歸かへす不憫ふびんさに。思おもはず涙なみだこぼ
 せしよ。聞きくに石童地いしどうちに伏ふして。はつと計ばかり
 に泣な沈さしつむ。漸ようく涙なみだを押おし拭ぬぐひ。是これは誠まことか御おん
 僧そうよ。はかなく成なりし上うへからは。定さだめて印しるしは
 有あららん。哀あわれせめては其墓そのはかを。教おしに下くださ

給へかし。今道心の重氏が。涙ながらに
たちわが 立ち上り。其頃立てし新しき。石碑の前に連
ゆき れ行て。是が汝の父上の。はかなくなりし
ろのあと 其跡ぞ。云れて石童涙ぐみ。豫て用意の麻
びろもろれ 衣。其を石碑に打掛て。父上菩提と拜み上
かくなら げ。斯成れしとは夢知ず。母上様と諸共に。

遙々尋ねて来りしが。母は麓に残し置き。
わた 私し一人では迄も。尋ね来りし折柄に。御
はて 果なされし其様子。草葉の蔭に聞き玉へ。
ろれ 其に掛たる御衣は。我が姉上の御土産と。
もつ 持て来りしかいも無。父の石碑を撫さす
り り。せめて御聲が聞たしと。袖にしぐる。

涙雨なみだあめ。現在いま實父じつふの荻萱かきかやは。此このくり言ことを聞きに
 つけ。胸張むねはり裂さん計ばりにて。思おもはず知しらず泣な
 き沈しずむ。漸やうやう涙なみだの顔がを揚あげ。如何いかにも道どう
 理遙々りはるぐと。野山のやまを越こて尋たずね來きて。世よに無な人ひと
 と聞きからは。名殘惜なごりをしは無理むりもなし。とは云い
 ひ乍な是非なりせひも無なし。歎なげくは佛ほとけの爲ためならず。一ひと度たび

麓ふもとへ下くだられて。母上様はうへさまに此譯このわけを。話はなして回まわ
 向かうなし玉たまへ。是これは御山みやまの御開山ごかいさん。弘法大師かうぼうだいし
 の御供物おくもつ。母はへの土産みやげに遣つかさん。云いれて石いし
 童嬉どううれしげの。涙なみだながらに立上たちあり。押頂おしいたひて
 下くだける。

◆父子師弟結約和讃

哀あわれなるかな母親は、おやは。我わがこ子の歸かへりの遅おそき故ゆゑ。行衛ゆくゑ何所いづくと案あんじられ。持病じびやうの癩しやくに惱なやまされ。石童いしどうの姿すがたは見みゑざるか。戀こいし我子わがこや我夫わがつまと。彼方あちらを見みては打倒うちたをれ。此方こちらを見みては伏轉ふしやろび。最後さいごも近ちかき御有おんありさま様ついで。遂ついにはかなき憐あわれさよ。石童いしどうそれとは露知つゆしらず。玉屋たまやが茶ちや

屋やに下くだり來きて。草鞋わらじを脱ぬぎて足あしすゝぎ。奥おくの一ひと間まに馳はしり行ゆき。襖ふすまを開ひらき手てをつかへ。母は、上うへ様さまよ石童いしどうが。只今ただいま歸かへりて參まいりしと。云いども呼よべ共答ともこたへなし。是これは不思議ふしぎと立寄たちよりて。様よう子すを見みばこゝろ奈何いかに。惣身ろうしん既すでに冷ひへ渡わたり。石いし童どう見みるより驚おどろきて。思おもはず知しらず聲こゑを上あ

げ。前後せんごを忘わすれ泣なき沈しづむ。助たすけ給たまふや南無なむ
 大師だいし。漸やうやく涙なみだを押おし止とどめ。野邊のべの送おくりを營いとな
 みて。形見かたみに残のこる白骨はつこつを。涙なみだ乍ならに拾ひろひ上あ
 げ。天てんにも地ちにも便たよりなき。父上ちちうへさま様には生いき
 別わかれ。母上ははうへさま様には死しに別わかれ。心細こころぼそくも只ただだ
 獨ひとり。最も早はや尋たずぬる者ものはなし。如何いかに吾身わがみを致いた

さんと。天てんには仰あげ地ちに伏ふして。なげく心こころの
 哀あわれさよ。最も早はやや便たよるは國許くにもとに。残のこり居をり
 ます姉あねばかり。早はやく歸かへりて此由このよしを。姉上あねうへさま様
 に傳つたへんと。年としは十四じゅうしの幼れさな子こが。西にしの筑つく
 紫しに歸かへらんと。歩あゆみもならぬ石童いしどうは。五里ごり
 や六里ろくりで宿やどをとり。漸やうやう々きこく歸國きこくして見みれば。

哀あわれなるかな姉あねうへ上へは。無常むじやうの風かせにさそわ
 れて。はやしじゆうくにち四十九日はうじの法事はうじなり。石童いしどうは早はや
 く姉あねうへ上へに。一いちぶ仕し始じゆう終ゆうを語かたらんと。勇いさみ歸かゑれ
 ば此このしまつ仕さい末まつ。聞きて其その場ばに打うちたは倒はれ。親しんせき縁えん者じや
 がありし共とも。昔むかしの歌うたに有ある如ごとく。落れちぶれて
 袖そでに涙なみだの掛かる時とき。人ひとの心こころの奥おくぞ知しるゝと。

加藤かとうを名なのる石童いしどうも。一ごと度どなららず二ふた度どな
 らず。姉あねうへ上へかかけて三さん度どまで。いかに子こ供どもで
 あり乍ながら。無ぶ事じを感かんじて發はつ心しんし。石童いしどう心こころに
 思おもふ様よう。誰たれを便たよらん人ひともななし。高野かうやへ登のぼり
 し其その時ときに。憐あわれみ受うけし御ご出しゆ家つ様けさま。心こころのせい
 か何なんとなく。父ちちうへさま上へ様さまと思おもわれれて。よよし父ちちうへ上へ

様さまでなき迎むかも。親切しんせつ深ふかき御僧おんろうに。譯わけを語かたり
 し事ことなれば。御弟子みでしにして被下くださると。便たよにす
 るは御出家ごしゆつげさま様。再び高野かうやへ登のぼり行ゆき。今は
 荊萱道心かるかやせうしんの。庵家あんやの口くちに立寄たちよりて。御僧御おんろうお
 願ねがひ申まふます。聞きくに荊萱道心かるかやせうしんは。佛ほとけの教おしへに背そむ
 かれず。思おもひ心こころを鬼ににして。一度いちどは石童いしどうを

返かへしけり。其後そのご忘わするに忘わすられず。子煩悩こぼんのうに
 なやまされ。現うつらとなく夢ゆめとなく。石童いしどうの事こと
 が思おもれて。成ならぬ所ところへ聲こゑを聞きき。現在げんざい親おやの
 道心どうしんは。飛立程とびたつほどに思おもへども。体ていよく心こころを押お
 し沈しずめ。其方そのなたは今又いままた参まゐりしか。此方こちうへ上あがり
 寛ゆつくりと。話はなしは残のこらずするがよい。石童丸いしどうまるは

よろここ喜びびて。實じつは御僧おんそうに別わかれてより。麓ふもとへ下くだれ
 ば母上ははうへは。持病おびやうの癩しやくに惱なやまされ。其上そのうへ石童いしどうに
 憧こがれ死しに。詮せんなく國くにへ歸かへるれば。便たよりに思おもふ
 姉上あねうへさま様いさま。今このよは此世このよに在おわされず。如何いかなる罪つみ
 か此身このみほど。思おもへば積つもる不幸ふしあわせ福いまま。今このよは頼たのめる
 人ひともなく。思おもひ出だしたは御出家ごしゆつ様けさま。必かならず救たす

けて給たまはると。是迄これまでの登のぼりて參まゐりしよ。御僧おんそう
 何卒なにぞぞ慈悲じひを持もちち。御弟子みでしに成なし玉たまあれど。
 袖そでに縋すがりて頼たのみ入いる。聞ききし苾芻かるかやどう道心しんは。
 共ともに涙なみだに暮くれにけり。其方そなたがそいう言いふ譯わけな
 れば。直ただちに弟でし子しに爲なしたまふ。必かならず心しん配ばいせぬ
 がよい。御情おなさけ深ふかひ御言おんことば葉は。石童丸いしどうまるは喜よろこびて。

荻萱道心の御弟子となり。其後互に親と
かるかやどうしん おでし
 子が。師匠よ弟子よと名乗のみ。荻萱道心
ししやう でし
 は石童丸を。弟子に連れ高野山を立ち。諸
いしどうまる でし
 國を巡り巡りて。御出なさる所は信濃國。
こく めぐ めぐ おいで
 此所に住所を定められ。終に親子を名乗
こゝに じゆうしよ さだ
 らずに。日出度一生を終られました。
めで たくいっしよ をわ

今に信濃國は。川中島の善光寺に。石童寺
いま しなののくに かわなかじま せんこうじ いしどうじ
 と其名を残す。親子地藏の御物語り
そのな のこ おやこ おぢやう おんものがた

南無親子地藏尊
な なむ おやこ おぢ ぞう ろん
 南無親子地藏尊
な なむ おやこ おぢ ぞう ろん

をんあぼさきやべいろしやのうまかぼ

だらまにはんぞまごんばらばらばり
たやうん

南無大師遍照金剛

南無大師遍照金剛

大正十四年十一月二十日再版印刷
大正十四年十一月廿五日再版發行

(かるかや
石堂九一代記和讃)

不許

複製

德島縣阿波郡八幡町大字
切幡百七十三番屋敷

著作兼發行
印刷人 淺野伊勢吉

德島縣阿波郡八幡町大字
切幡百七十三番屋敷

大販賣所 淺野伊勢吉本店

終

